

次世代放送技術に関する研究会(第1回)

議事要旨

1. 日時

平成18年9月27日(水) 10時00分～12時00分

2. 場所

総務省 第一特別会議室(8階)

3. 出席者

(1) 構成員(五十音順、敬称略)

相澤彰子、秋葉重幸、伊東晋、江崎浩、小川克彦、小林哲、佐藤一彦、真城良一、谷岡健吉、都竹愛一郎、原島博、前野春枝、三谷政昭、横井亮介、(代理)榎並和雅

(2) 総務省

鈴木情報通信政策局長、中田大臣官房審議官、山根総務課長、南放送政策課長、大久保放送技術課長、安藤地上放送課長、武田衛星放送課長、布施田放送技術課技術企画官、本間地域放送課技術企画官、近藤放送技術課課長補佐

4. 議事内容

(1) 開会挨拶

(2) 構成員等の紹介

(3) 開催要綱の決定

(4) 座長の選出(原島構成員が座長に選出された)

(5) 座長代理の指名(伊東構成員が座長代理に指名された)

(6) 研究会の公開について

(7) 総務省における研究開発への取組みについて

(8) 放送技術に係る最近の技術動向について

(9) 研究会の進め方について

(10) 自由討議

(11) アンケート調査について

(12) 閉会

5. 主な議論

事務局より、配付資料について説明がなされた後、各構成員にて自由討議がなされた。主な議論は以下のとおり。

- 情報の世界と対比して、ログというものがビジネスモデル等につながるものであると考えると、現在の映像を大量にアーカイブ可能にし、ログとして活用可能にすることが技術的課題として考えられる。
- テレビ会議のように複数の人が映っている画面のやり取りははやる。グループ参加型テレビは今後の次世代デジタル放送の1つの方向ではないか。
- エンドユーザーから制作者サイドまでの幅広い可能性を担保するような技術規格を、グローバル性がありアプリケーションに依存しない形で策定する必要がある。
- 通信の世界では、コンテンツの中に広告を埋め込んだものが出てきており、放送における広告の作り方についても同様の変化が予想される。
- インターネットの世界でもそうであったように、次世代放送システムにおいてもロングテールをどれだけ可能性として担保できるようにデザインするかが重要。
- 「いつでも・誰でも・どこでも」という技術だけではなく、「今だけ・ここだけ・あなただけ」という安心・安全、優良サービスを考慮した技術についても検討する必要がある。
- 今の若い世代は、映像に対して先見的な能力を持っていると思いがちだが、映像を見る力については不十分。そういうところをカバーしながら人材育成をしていかななくてはならない。
- メーカーとしては、ユーザーによりよいものを提供するために、次世代放送技術を考える上では「国際競争力」という観点が重要と考える。
- 途上国ではまだテレビもろくに見られないという非常に大きなマーケットがある。そういう状況の中で、「安心・安全」についてのグローバルニーズに対応した技術開発も重要なテーマ。
- 放送の分野でモバイル受信というのは、現状では固定受信に対して付随的なものであるが、途上国やグローバルなマーケットでは、モバイル受信のテレビがメインになることもあり得るのではないか。
- ヨーロッパの方でも10年先、20年先の放送技術開発のメインとなるストーリーは描きれておらず、日本のスーパーハイビジョンという技術に非常に関心を

持っている。特に日本が得意とする映像音響の技術において、日本がリーダーシップを取って、国際協調の中で開発すべき。

- 伝送方式が変わっても、ソフトウェアを入れ替えれば対応できるソフトウェア無線も重要な技術になると予想される。これは、パソコンのようにソフトを入れかえれば何でも動くというイメージではあるが、決してテレビがパソコンのように複雑にならず、「家電製品」として放送が健全に発達することが望まれる。
- 地上デジタル放送でいえば、国が進めている内容を今後5年間でどうやって消費者に、特に高齢者や弱者に伝えていくかは重要な関心事。
- 映像・音声だけではなく、触覚、匂い、といったものを含め、ハードウェア技術と人間科学的な研究を同時に検討していくことも重要。
- 現在放送といえばテレビというイメージが定着しがちであるが、ラジオの活用についても検討の必要がある。特に映像にはない音声の強みも活かして考えていきたい。
- デジタル化の進展に伴って劣化の少ない編集加工が容易になっており、情報のオリジナリティというものがどこまで確保できるかという、放送の安心・安全という観点からの検討も重要課題。
- 従来データ圧縮というのは、できるだけ低レートで情報を送りたいという1点で進んできたが、そろそろ少し考え方を換え、今までと同じ伝送レートでよりきれいな画像が送れる、或いはよりきれいな音質のサービスができる、そういう品質の改善・向上の手段としてデータ圧縮技術をとらえるべきではないか。

以上